

# 肌の間から 見つけた「わたし」

芸術研究科 造形表現専攻  
写真・映像領域 博士前期課程  
2026年3月修了

王 紫薇

主査 百瀬 俊哉 副査 大日方 欣一 佐藤 慈

## 研究背景

写真という芸術は、200年以上の歴史を経て発展を遂げてきた。デジタル時代を迎えた現代においては、撮影機器や展示方法、さらには伝達手段までもが大きく革新されている。写真は「鑑賞」の対象から「対話」の媒体へと変化した。SNS時代では人々は写真を見るだけでなく、コメントを残し、自分の意見を発信できる。作者もまた「いいね」やコメント、シェアといったインタラクティブな形式を通じて、多角的な観客からのフィードバックを得ることが可能となった。これによって、同一作品に対する評価は賛否両論生じ、そこから新たな思考が喚起されることとなる。

## 研究方法・目的

本研究は、人体が持つ独自の特性、特に皮膚の構造的なテクスチャーと他のテクスチャーとの相似性、そしてその視覚的表現のあり方に焦点を当てる。それが写真の中でどのように現れるのかを観察し、人体のさまざまな部位や異なる状態にある皮膚を撮影することで、その内に潜む無限の可能性を捉えていく。ここでいう「未定義」とは、既存の美や記録の枠に収まらない、人間の身体がもつ曖昧さ・変容性・境界性を指す。

SNSを通じて「他者の視線」に晒される現代社会において、人体は「定義」の被写体ではなく、常に定義され、再定義され続ける存在である。本制作はその循環的な視覚現象を逆手に取り、写真という手段によって、人体に宿る「未定義」という特性を可視化する試みである。

## 研究概要



## 成果・まとめ

私は、写真を媒介として人体の無限の可能性を探索し、「人体」に対する理解をさらに深めるとともに、レンズを通して「観察」から「発掘」へと至る思考の深化を試みた。

この研究は、私のしばしば逸脱的な思考によって推進され完成したものでもある。レンズを様々な個体に向けるとき、私はいつも皮膚のテクスチャーに潜む生活の痕跡や、肢体が曲がる際に引き寄せられる筋肉の線に見とれ、それらの画面が人体と世界との対話のもう一つの形態ではないかと無意識に考えてしまう。これは革新であると同時に、私自身が人体を理解する過程でもあった。レンズを通じて人体の各部位と他の要素との境界を曖昧にすることは、人体へのさらなる理解に直結している。



## 指導教員コメント

本作品は、皮膚のテクスチャーに着目することで、人体を固定的な対象としてではなく、常に定義され続ける存在として捉え直す試みである。観察から発掘へと至る制作姿勢は、身体と世界との関係を写真によって可視化しており、人体に内在する曖昧さや変容性を豊かに表現している。写真を対話の媒体として用いる視点も明確であり、現代的な身体表現として意義深い表現である。

百瀬 俊哉